


在外研究員研究報告書

2020年11月23日 受付

所 属	グローバル地域文化学部/グローバル・スタディーズ研究科		氏 名	錢 鷗	
職 名	教授				
研究課題名	近代東アジア公共領域の形成における翻訳と「モダニティ」の再考				
研究期間	2019年3月20日～2020年3月19日				
滞在期間・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2019年3月20日～ 2020年3月19日	パリ	Centre de Recherche Linguistique sur l'Asie Orientale, Centre d'études sur la Chine moderne et contemporaine, コレージュ・ド・フランス、フランス極東学院、フランス国立図書館、Missions étrangères de Paris)、ギメ東洋美術館など		
研究費	227 万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日	
	1、東西学人の文通から見えるものー未公開書簡を検討しながら	1、『文献』双月刊 2021年第3期		1、2021年8月(投稿中)	
	2、三つの時代における記憶ー王東明インタビューを通して	2、『文史』2021年第1輯		2、2021年4月(投稿中)	
	3、王国維・羅振玉の甲骨研究ー「新」「旧」史学の接点をめぐって	3、『桃の会論集』九集		3、2022年3月(予定)	
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
演 題	講 演 学 会 名		講演年月日		

研究成果の概要

研究課題名：近代東アジア公共領域の形成における翻訳と「モダニティ」の再考

パリ市内にある Centre de Recherche Linguistique sur l'Asie Orientale. EHESS を拠点とし、Centre d'études sur la Chine moderne et contemporaine. EHESS、コレージュ・ド・フランス、フランス極東学院、フランス国立図書館、パリ大学、パリ外国宣教会 (Missions étrangères de Paris)、ギメ東洋美術館など多くの学術・文化機構を利用し、研究者と頻りに交流しながら研究を進めていた。上記の機構にはヨーロッパ最大な言語文字学図書館、史料館であり、多くの貴重文庫があり、その中未公開の史料も少なくないため、些か消化不良になっているものの、調査の収穫が予想以上に多かった。研究調査は主に以下二つの方面において行われていたが、その一斑を報告したい。

1. ことばと翻訳—学術史の視座

王国維(1877～1927)は1898年2月から1900年秋にかけて、ヘルムホルツ(H. Helmholtz)の物理学著作 The Theory of the Conservation of Energy を中国語に翻訳した。十九世紀末は、一世紀ほど前に専門化がはかどった「科学」が逆説的に自然科学の域より飛び出し、物質的実証と厳密な推理と相まって、人文社会学の既存の枠組みを組み替え変貌させはじめた時代である。本研究はエネルギーの不滅という物理学理論およびエネルギーの概念の伝播と翻訳を近代日中両国とヨーロッパとの学術思想史との相互作用の具体的な文脈の中で考察したものである。すなわち、エネルギーの不滅の理論およびその拡散的思考の枠組みがいかに東アジア人文学の再活性化に結びついたか、それによって引き起こされた学術的思想的共振とはいかなるものであったかに焦点を当てていたのである。

前年度の研究においてもキーワードとしての「エネルギー」および「エネルギーの不滅」の翻訳とその周辺に関する考察を通して、王国維の翻訳と原著との基本関係を明らかにしたとともに、十九世紀以来の各種の辞書における関連用語を比較しながら「力」、「勢」、「勢力」は日本語、英語、フランス語などどのような対訳関係があるかを探っていた。今回の研究は「勢力不滅」の起源とエネルギーの不滅の理論が東アジアにおける伝播の歴史的軌跡を可視化する一方、エネルギーの不滅という科学の理論は如何に物理学を越えて人文社会学の領域で人々を熱中させ、その「教義」を拡散させていったかを検討した。それによって、自然力の交互関係とエネルギーの不滅の理論はヨーロッパにおいても当初物理学の学知にとどまらなく、哲学、心理学、倫理学、教育学に広まって複雑な問題群を形成させていたプロセスはある程度明らかになった。つまり、日本語、中国語における「エネルギー」の概念に関する多種多様な翻訳語とその解釈チェーンを明らかにすることによって、「勢力」という漢語は政治、軍事の次元から脱離して一科学の概念に変身したというよりも、「科学」を媒介して哲学、心理学、論理学と倫理、美についてのことを「科学」の新たな世界観のなかで捉え直そうとする「超科学」的概念となったと言える。

日中学術の近代の変容を語る時、避けられない一つの局面がある。つまり、両国とも長い歴史のなかで知的生産活動を続けてきたにもかかわらず、十九世紀になってはじめて自分の歴史は「歴史」ではなく、「史料」にすぎないものと化した局面に直面せざるを得なかったことである。これはまさに王国維、羅振玉や狩野直喜、内藤湖南などが代表とした明治・大正期の学術文化の自己形成が直面した最大な課題である。彼らは十九世紀末にある狭義的な科学方法と技術が人文社会学を統率しようとする流れのなかに、「科

学の方法」を導入しつつも「伝統」的な知識体系と結合・融合させる形で中国、日本ないしアジアの特殊問題に適用していくなかで、国家や民族を越え、新たな知的共同体を結成し、頗る興味深い知的連携をはかどっていったのである。

2. 敦煌学の興起——シノロジー (sinologie) ・東洋学・新古典学の出会いと学術のパラダイム転換

十九世紀末と二十世紀初期は、あらゆる学問にとっても「物質証拠」を求める時代だと言っても差し支えない。世界規模の探検活動や考古発現による新資料の噴出は、ヨーロッパのみならず東アジアの学術地形をも激変させた。帝国の版図の拡大と学術研究の領域の拡大と相まって方法論の変容が余儀なく要求され、それを契機に学術の国際交流もこれまでのない新しい局面を創出された。近代東アジアの学術基盤を築いたのは、ほかならぬこのような国際交流と方法論の変容による「充実」を所有するものである。そうした「充実」を最も早く作り出したのは、日本では東洋学・東洋史の「京都学派」と称される狩野直喜、内藤湖南たち、中国では、むしろアンチ「科挙」の王国維、羅振玉などの新鋭学者たち、フランスでは、エマニュエル・エトゥアール・シャヴァンヌ (Émile-Édouard Chavannes, 1865-1918)、ポール・ペリオ (Paul Pelliot, 1878-1945) であった。しかし、フランスのシノロジーと中国の新古典学と日本の東洋学との出会いは、「科学方法論」の伝播の必然的な産物ではなく、中央アジア考古探検の一大事件——敦煌文書の発現によるものであったといっても差し支えない。時代に敏感な中国と日本、フランスの知識人たちが、敦煌文書の発現に牽引され、現実の政治や国家の束縛を断ち切って空前な学術交流と対話を作り上げていたプロセスは、彼らの残した多くの書簡や日記、「遊記」によって明らかになったことが少なくなかった。

シャヴァンヌは、フランス近代シノロジーを築き上げた最も重要な人物である。また、中国ひいては東アジアの知識体系そのものに対する挑戦者でもある。彼の学問は、古文字学、碑銘、敦煌文書、西チュルクの文献、西域・中央アジア各地の歴史、中国歴史地理学など非常に広範な領域にゆきわたっているのである。シャヴァンヌは頗る文献と実物との対比研究を重視し(実際、考古物や石碑拓本に対する収集・整理・考釋の仕事は彼の生涯にわたっていた)、中国への現地考察、中国と日本の学者と密接に交流する新たな伝統を作り出した。『史記』封禅書を訳注した時、彼は文献記載の裏付けとなる文物を求めて自ら泰山に登った。これらの実績によって、シャヴァンヌは中国伝承の文献資料を超え、中国歴史研究の資料を大いに充実させた。このような方法は、十九世紀の後半、ヨーロッパにおける歴史学は事件史から社会史、文化史の研究に転換しかけていたこととも関わっているが、シャヴァンヌは孔子が築いたとされる礼樂の制度は遥かなる古代にあったと見なし、つまり、中国の封建礼制は当時勝手に作られたものではなく、より古い習俗にその源流を求められるという(この見解は、王国維の宋元戯曲研究にも見られるのである)。

Stein Marc Aurel (1862-1943) は、1900~1906の間に行った探検によって得られた万人の注目するところとなっていた敦煌木簡を、シャヴァンヌに交付し考釋の協力を求めた。シャヴァンヌは膨大な量にのぼる木簡を精力的に整理・考釋したがなお疑問点が残っていたため、1912年、彼は数年間の労作である敦煌木簡の考釋とその疑問点を集め、辛亥革命を避けて京都に身を寄せていた羅振玉、王国維に郵送した。これは、ちょうど金石文字、甲骨文字、敦煌文書の考証研究に潜り込んでいた羅、王両氏にとって、まさにこのうえのない貴重資料との出会いとなった。やがて、シャヴァンヌは羅振玉、王国維らとの切磋琢磨を通して、1913年シャヴァンヌは *Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan oriental* を刊行した。従って、羅振玉と王

国維は、シャウアンヌの著書と木簡を丹念に研究した後、木簡の内容と文書の性質によって新たに分類し、木簡の順序も配列し直し、1914年、避難先の京都で『流沙墜簡』を出版した。

フランス、中国、日本という異なる地域または相違する知的バックグラウンドをもつ学者たちが同一の研究対象—敦煌文書に学術の関心を向かわせたのは、これまでのない現象であり、やがて敦煌文書を中心とした資料のやりとりは密接な学術対話と研究の切磋琢磨を生み出したのである。中国・日本の知識人たちは「物質証拠」に基づく「科学方法」に接近し、それを中央アジア史、中国史の研究に運用することによって当該研究領域における活発な国際交流ネットワークを確実に築き上げたのである。

激しく変容しつつあった東アジアの学術は、膨大な考古学の「発見」に刺激され、「物」から多大な「史料」を獲得したのみならず、フランスのシノロジーとの出会いは、やがて互いにも学術のパラダイム転換を引き起こしてしまったのである。1910年、羅振玉は北京でマニ教文書を刊行した時、ペリオはこのニュースを鋭くキャッチし、シャウアンヌに報告し、二人はすばやくこの新資料の翻訳と注釈を行い、1911年、Un traité manichéen retrouvé en Chineを刊行した。1913年、シャウアンヌとペリオは、さらに中国におけるマニ教関係の歴史文献を考証しつつ、中国とその周辺地域におけるマニ教伝播のプロセスを詳しく描くことかできた。一方、ほぼ同時期に羅振玉と王国維が甲骨文字に対する本格的収集・整理と研究をスタートし、また、王国維の京都時代は哲学、文学、戯曲の研究から上古史研究に方向転換したことは、敦煌文書の発見とそれをめぐるフランスシノロジストたちとの密接な交流とも無関係ではないように思われる。また、フランスのシノロジストたちが同時代の中国・日本の東洋学者たちとのかつてにない学術情報のシェアと共同研究は、ヨーロッパの東洋・中国研究をも変貌させることとなる。例えば、その後のヨーロッパの中国地域は中国の周辺地域から中国の中心地域へと移動し始め、考古学による物質的「実証」と歴史学の「記憶」（中央アジアや漢字文化圏知識体系の）と慎重に参照・考究するようになった。意味深いのは、このことはやがて「科学」の史学理性によってしばしば無視されてきた関係性を探求する契機となったのである。

以上をまとめて言えば、まず、十九世紀末と二十世紀初期における翻訳運動と敦煌文書の発見によって、中国、日本、フランスそれぞれ国内で学者だけではなく、官僚、政治家、出版界、宗教機構など広範囲にわたる一個の新しい学術共同体が確実に形成されていたことは明らかになった。また、これまで異なる知的体系を有する中国、日本、フランスのどちらにおいても一つ目覚ましい研究の「慣習」—連動と交流のネットワークを作り上げたことの意義は大いに見直されることとなった。王国維がいわゆる「二重証拠法」を用い、殷墟に出土された甲骨文字の研究によって、「殷卜辭中所見先公先王考」、「續考」など一連の名著を完成したのも、このような国際学術ネットワークとリンクした事実と無関係ではあるまい。やはり近代における学術の相互作用の実態は、これまでの通念を遥かに凌いでいることに違いないであろう。

錢 遜